

第35回日本創傷治癒学会を終えて

会長 熊谷憲夫
(聖マリアンナ医科大学形成外科学講座)

第35回日本創傷治癒学会は2005年12月5日(月)6日(火)の両日、東京千代田区の全共連ビルで開催されました。

近年、創傷治癒に関する基礎研究が飛躍的に進歩し、臨床面ではサイトカイン治療、多血小板血漿療法、さらにはヒト培養細胞移植といった再生医療による新たな創傷治療が難治性潰瘍の治療に用いられるようになりました。また、最近の高齢化社会にあって、褥瘡や糖尿病性潰瘍といった難治性潰瘍の治療が大きな課題となっています。このような背景から、医師、看護師をはじめとして医療関係者の本学会に対する期待も高まり、今回の学会では70演題、2日間でのべ350人という多数のご参加をいただきました。学会主催者として、本学会の益々の発展を確認しますとともに、皆様のご支援に心より御礼申し上げます。

本学会の特別プログラムとして、米国から William J. Lindblad 先生、デンマークから Finn Gottrup 先生の2名の海外招待講演者をお迎えしました。Lindblad先生は、学会公式機関誌 Wound Repair and Regeneration のchief editorとして活躍されておられます。今回「Alteration in diabetic fibroblast function: implication for wound healing」というテーマで講演されました。糖尿病患者さんの難治性潰瘍について、皮膚のfibroblastの細胞機能低下という面からのアプローチで発現機序を解明されました。一方、Gottrup先生はEuropean Tissue Repair Society Meetingを主催され、現在、同学会のboard memberとして活躍されておられます。「Modern Wound Healing :Status of Research and Practice and Future Development」と題して、デンマークにおける創傷治療センターでの難治性潰瘍のチーム医療の現況、また医師の教育、基礎研究の大切さ等についてご講演頂きました。

主題「血管新生と創傷治癒:基礎と臨床」では、消毒薬の創傷治癒への弊害、bFGFの瘢痕拘縮抑制効果の機序、人工真皮への血管進入促進効果の工夫とその臨床応用、難治性潰瘍への自家骨髄移植の臨床成績などが報告されました。

主題「被覆材の効用」では、光硬化性キトサンの分解に関わる因子、新しい創洗浄システムの導入と湿潤療法による創傷治癒促進効果、創傷被覆材の効果的な利用法、顆粒型ハイドロコロイド製材の特殊部位における使用法などが発表されました。

主題「各種疾患に合併する難治性潰瘍の治療戦略1」では、キトサンパウダーと5-アミノサリチル酸含有ゾル注入療法の効果、感染創に対する創内持



NEWS
LETTER

日本創傷治癒学会

2006.4
No.32

● 日本創傷治癒学会事務局

〒160-8582

東京都新宿区信濃町35

慶應義塾大学医学部外科学教室内

tel. 03-3353-1211

(内線62269)

fax.03-3353-2681

e-mail: info@jswh.com

URL: http://www.jswh.com

続陰圧洗浄法、Vacuum Assisted Closureの改良法、難治性下肢潰瘍治療時における皮膚灌流測定に基づいた血行再建が報告され、難治性潰瘍治療への新たな治療戦略が報告されました。

主題「各種疾患に合併する難治性潰瘍の治療戦略2」では、PPAR γ 遺伝子導入による角膜潰瘍治療の実験的成果、難治性足趾潰瘍の治療戦略、下肢静脈性潰瘍に対する診断・治療のストラテジー、ラップ療法の有用性等について臨床的新知見が発表されました。

主題「体性幹細胞と組織再生」では、皮膚創傷治療時における炎症反応遺伝子群の発現様式と遺伝子発現抑制による癒痕形成の変化、各種動物由来の脂肪組織由来幹細胞の多分化能と移植後の組織再生、Shc familyのShcCと創傷治療との関係、高線量放射線照射下での間葉系幹細胞の生存とシグナリング、間葉系幹細胞移植後の骨再生過程などに、関し最新の基礎研究の成果が報告されました。

一般演題として43題ご応募頂きました。組織再生、創傷処置、増殖因子・接着因子・サイトカイン、感染及び難治性潰瘍・褥瘡、遺伝子治療、症例報告といった

最新のテーマについて大変興味ある知見が報告されました。さらに、今回から若手研究者のmotivationを高めるため優秀な論文に対し研究奨励賞を設けることになり、栄えある第一回目の受賞者として、和歌山県立医科大学の近藤稔和先生が選ばれました。「皮膚損傷におけるIL-1 α の病態生理学的役割解析」というご演題で、北島政樹日本創傷治療学会理事長より賞品が授与されました。今後、多くの若手研究者がこの賞にチャレンジし、本学会をなお一層盛り上げる原動力になって頂きたいと期待しております。

最後になりましたが、予想を超える参加者があり、学会初日は座席が足りずに大変ご迷惑をおかけいたしました。過密なスケジュールと、このような状況下にもかかわらず、大勢の先生が朝から夕方遅くまでご参加下さり討論に加わって頂きましたことは、主催者として大変ありがたく思っております。また、講演、座長をお願いいたしました先生方のご協力とご厚情に深謝申し上げますとともに、本学会の開催にあたりまして多くの学会関係者の方々ならびに関係各位から多大な御尽力を賜りましたことに、あらためて御礼申し上げます。

WRR拡大編集委員会のご報告

長崎大学形成外科 秋田 定伯

第35回日本創傷治療学会期間中(平成17年12月5日)開催されました、Wound Repair and Regeneration誌の編集会議での討論事項です。

大谷吉秀理事から、会の参加者について解説がありました。Lindblad編集長を始め、日本創傷治療学会からは塩谷先生(associate editor)、野崎評議員(今回欠席)、岡田評議員(今回欠席)、大谷評議員、徳永評議員のEditorial Board Memberに加え、今回は、日本創傷治療学会 北島政樹理事長、国際委員会の小野評議員(委員長)、赤坂評議員、

篠澤評議員と将来構想検討委員会の秋田評議員、事務局幹事の吉田 昌評議員を加えた「拡大」Wound Repair and Regeneration編集会議となることが確認されました。

まず、Lindblad編集長から、主に2004年度の編集上の各項目につき説明がありました。

1 2004年は編集management担当者としてJason Roberts博士に参加していただき、紙面での投稿からonline投稿に変更しました。2004年の3月から

のオンライン“Manuscript Central”開始後2004年は全投稿の50%が、2005年には90%の投稿がオンラインになりました。投稿数の増加が2004年は顕著で2003年の140論文と比較して、169投稿まで増加しておりました。アメリカ国内の投稿数は依然として多いものの、特に国際的な投稿数の増加が見られました。国別では日本の投稿数の伸びが顕著です。

- 2 Wound Repair and Regeneration誌(以下、WRR誌)の発行は順調で、年間6回のうち3回は最初の月に発行しており、5回は発行期限が厳守されました。また、オンラインでの発行は印刷誌の発行に先行しており、全発行ページは785ページで2003年の625ページと比較しても多く、過去最大となりました。
- 3 WRR誌のオンラインでのPDF及びHTMLへのアクセス数は2004年では67,375アクセスであり、2003年の50,472アクセスと比較し増加しておりました。また、2005年については目下集計中であるものの、2004年以上のオンラインアクセスがあるとのことでした。
- 4 ISI社の“Impact factor”では、2003年の1.757から2004年は2.00以上に上昇したとのことでした。医学系雑誌全体ではおよそトップ10%であり、Impact factorの経過としては、2002年の2.505から始まり、2003年には一旦2.00以下となったものの2004年には2.074となりました。臨床領域では皮膚科の専門誌の38誌中7位であり、外科系雑誌のうち24位でした。また、医学研究・実験領域では72誌中29位でした。
- 5 付録2に過去9年間の投稿数の国別分布を示しています。アメリカ合衆国が依然として2004年でも最大の投稿数を示していますが、2004年のデータは紙上投稿と限られたオンライン投稿の合計です。オンライン投稿の開始後初めての投稿国が増え、日本はイギリスと並んで2番目に投稿数の多い国になっております。集計中ですが2005年は日本から20

以上の投稿があります。

- 6 2004年の投稿のうちの非採択率は前年2年間と同様で54.4%でありました。この非採択率には学会報告の論文を含めておりません。過去12年間の非採択率は付録3に掲載しています。2004年は50%以上の非採択率でしたが、ページ予算以上の論文の掲載となっております。非採択率をこれ以上増やしたくないものの625ページの総ページ数予算を守るためには2005年の非採択率は増加せざるをえません。具体的には2005年は65%程度まで、2006年には70%にまで上昇させなければいけな
- 7 また、総ページ数の10%程度がWound Healing Society(WHS) European Tissue Repair Society(ETRS) 日本創傷治癒学会(JSWH)の抄録の掲載に当てられています。既にWHSの抄録はそのページに相当する金額を徴収しておりETRSも2006年から金額の支払い予定です。JSWHは2007年から有料化の方向に向けて検討しております。
- 8 査読過程の短縮も検討・改善項目であり、1名のEditorial Board Memberと1名の外部査読者からなる査読体制をとっていますが、BioengineeringとStem cellの専門家をEditorial Boardに加える必要がありそうです。理想的には、全査読期間を3週間で終了したい意向です。更に臨床系論文の査読は臨床家に、基礎的論文は基礎研究者に査読していただきます。投稿者に査読可能者を依頼する事も考慮中です。
- 9 “copyright assignment form”は投稿の際に必ずつけて投稿していただきます。
- 10 利害関係の衝突(conflict of interest)に関しての取り決めは目下、担当Editorial Boardに配布し検討中です。
- 11 臨床試験(Clinical Trials)に関して、New England Journal of Medicine誌、JAMA誌は厳

密に試験開始前のregistry(登録)を義務づけています。日本の状況は如何でしょうか? 参加者一同意見なし。この点については、今後とも検討事項とします。

12 新しい項目として、紙面の構成の変更を2006年から実施し、文字が多少小さくなるものの、年間8から10論文より多く掲載可能となります。

13 また、年一回の更新で表紙に実際の論文のデータを掲載します。今回からの新しい装丁にはVince Falanga教授グループの顕微鏡写真を採択しております。

14 オンラインの掲載を紙面の発行より先に、(最終的な論文状態で)少なくとも、閲覧可能な状態で掲載します。

質問

1 塩谷先生: 査読依頼された際に、PDFファイルが開封不可能な場合があったが、どのような理由によるものでしょうか?

Lindblad編集長: 今、はっきり思い出せませんが、何らかのmechanicalな問題であると思いますので詳細は後ほど調査して報告します。

2 秋田先生: Supplement(増刊号)は通常の発行ページ数とは関係ないのでしょうか?

Lindblad編集長: 増刊号(Supplement)は、通常のページ予算とは異なっており、1ページ当たりの費用も非営利団体によるものの場合、カラー写真の掲載の有無により\$125.00より安価になる場合もあります。

3 小野先生: 非採択率が高すぎるのではないのでしょうか? 紙面をbimonthlyからmonthlyに変更できないのでしょうか?

Lindblad編集長: 55%から60%程度の非採択率は合理的であると考えております。Monthlyへの変更はページ予算の面から現実的ではありません。Monthlyにすると予算は余計にかかります。実情として、日本からの論文の非採択率は30から40%程度と平均よりもかなり低くなっています。

4 大谷先生: 数年前のBordeauxでのEditorial board meetingでは、日本からの投稿数が少ないと欧米のEditorial Board Memberから指摘されましたが、付録2にもあるように2000年の投稿数1から2004年には17となり、投稿数ではアメリカ合衆国について第2位となっております。現在のEditorial Board Memberは総数30名のようですが、日本からは4名(野崎先生、岡田先生、徳永先生、大谷先生)のみです。日本からの投稿数も増加しておりますし、Editorial Board Memberの数を増やしていただけないのでしょうか?



Lindblad編集長: Editorial Board Memberの選定は Publication Committeeが決定しますが、日本創傷治癒学会の推薦を私にいただけましたら1名ないし2名のEditorial Board Memberの推薦は可能です。

5 北島理事長: 予算を増やすためにWRR誌の広告(advertizing)を増やしては如何でしょうか?

Lindblad編集長: 発行部数が少ないことと、専門誌のため企業の関心はあまりないのが現状です。出版社も種々の方法で収入を増やそうとしていますが、現在まとめて(bundle)が出版社は施設契約(Institutional contract)を結んでおり、その見直しと、個人での雑誌契約(Individual subscriber)から、オンラインの必要な論文の購入が主体となっており、広告収入は多く望めません。

日本創傷治癒学会 役員一覧(2006.1.6 現在)

【五十音順敬称略】

名誉会員 阿部令彦、阿部力哉、井口 潔、石引久彌、磯野可一、稲山誠一、内田雄三、遠藤光夫、岡田 正、掛川暉夫、古味信彦、櫻井健司、塩谷信幸、杉町圭蔵、田井良明、田中 隆、田辺達三、鶴藤 丞、林 四郎、藤城保男、三島好雄、三輪晃一、森 昌造(23名)

特別会員 青木照明、浅野伍朗、磯本浩晴、岩橋寛治、大浦武彦、加藤紘之、金澤暁太郎、上石 弘、小平 進、斎藤和好、杉立彰夫、鈴木邦夫、田澤賢次、中村輝久、中山一誠、西岡 清、船曳孝彦、細田泰弘、前田昌純、松野正紀、丸山圭一、宮内好正、毛利喜久男、渡辺洋望(24名)

理事 (*理事長) 石井壽晴、大谷吉秀、岡田保典、落合武徳、小野一郎、*北島政樹、黒柳能光、嶋田 紘、中島龍夫、野崎幹弘(10名)

監 事 熊谷憲夫、田尻 孝(2名)

事務局幹事 吉田 昌(1名)

評 議 員 相川直樹、赤坂喜清、秋田定伯、秋野公造、浅尾高行、穴澤貞夫、安藤暢敏、石井壽晴、磯貝典孝、市川英幸、岩井武尚、上尾裕昭、上田和毅、上田 実、内沼栄樹、大谷吉秀、大野真司、岡 博昭、岡田保典、落合武徳、小野一郎、加藤広行、川上重彦、貴志和生、北島政樹、北野正剛、木山輝郎、窪地 淳、熊谷憲夫、黒柳能光、桑野博行、古森公浩、近藤稔和、雑賀司珠也、坂本長逸、佐々木健司、笹嶋唯博、佐藤道夫、真田弘美、重森 稔、篠澤洋太郎、嶋田 紘、島田光生、調 憲、白水雄雄、鈴木茂彦、須田年生、炭山嘉伸、高野邦夫、竹之下誠一、田尻 孝、館 正弘、田畑泰彦、塚田邦夫、徳永 昭、渡会伸治、鳥居修平、中島龍夫、永田見生、中塚貴志、中西秀樹、名川弘一、野口 剛、野崎幹弘、畠山勝義、百束比古、平田公一、平林慎一、保阪善昭、丸山 優、森口隆彦、山崎洋次、吉田 昌、吉村陽子(74名)